

音 楽 科

音楽の魅力を感じて、進んで音楽にかかわりを持つ子供の育成

～音楽の魅力を感じて、音楽と自分のつながりを意識する授業の追究～

本校音楽科では、「学びに目覚める子供の姿」を「音楽の基礎・基本をしっかりと身に付け、音楽の魅力を感じて、進んで音楽にかかわりを持つ子供」ととらえて研究を進めてきました。

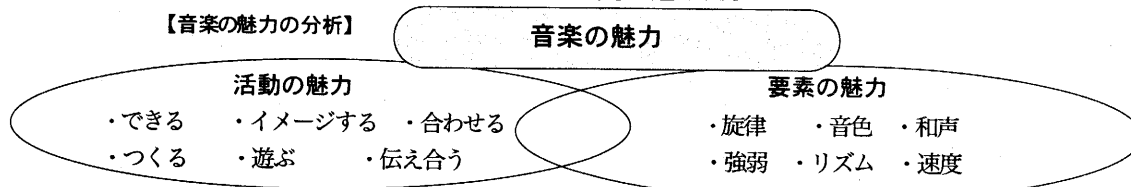
研究3年目の今年は、音楽の基礎・基本を身に付け、音楽の魅力について感じることに加えて、より音楽と自分のつながりを意識することができるような授業を展開することが、「学びに目覚める子供」を育てる最終のステップになるのではないかと考え、授業実践をしてきました。（音楽科主任 上山 登）



1 昨年度までの研究の成果と課題

第1年次では、研究副主題を「音楽の基礎・基本を身に付け、音楽の魅力を感じる手立ての構想」とし、発達段階に応じて高めたい音楽の基礎・基本について洗い出し、年間指導計画の中に位置づけた。また、音楽の魅力を感じることが自ら進んで音楽にかかわろうとする原動力になるのではないかと考え、子供が活動の中で、音楽の魅力を感じていると考えられる場面を取り上げ、類型化し、いくつかにまとめ、そこにこだわって授業を展開した。その結果、より子供が音楽の魅力を感じやすい教材や授業展開があることが分かってきた。

第2年次では、研究副主題を「音楽の魅力を感じて、活動意欲を生み出す授業の展開」とし音楽の魅力を「活動の魅力」（音楽活動そのものに対して感じる魅力）「要素の魅力」（音楽の諸要素そのものに対して感じる魅力）の2つに大別して研究を進めた。



音楽の魅力を感じるための題材展開の工夫や、子供自身が音楽の魅力を感じたことを実感し、次の活動に生かしていくためのドレみりよくカードの活用や振り返りの工夫などに取り組んだ。

成果としては、音楽の魅力を感じることが、次の活動意欲につながることで、また、振り返りを工夫したことで、自分で学習活動を整理することができるようになってきたことが挙げられる。

課題としては楽しかった、面白かったという表面的な感じ方だけでなく、より深く音楽の魅力を感じて欲しいということ、また音楽の魅力の感じ方や活動意欲の高まりは一人一人違う多様なものでありそれをどう受け止めて、どう生かしていくのか考えていく必要があることなどが挙げられる。

2 研究の方向

本年度は、昨年度までの研究の成果と課題を生かし、「学びに目覚める子供」の姿を具体化していくとともに、題材の中で育てたい子供の姿を重点化して、授業を実践していくことにした。

学びに目覚める子供の姿～音楽科～

- | | |
|---|--|
| ○ 音楽を生活に生かす子供
「授業でやったリコーダー合奏をさらに練習して、今度の学級活動で発表しよう。」 | ○ より深く音楽の魅力を感じる子供
「この学習を通して、音の重なりや響きはいろいろに変化することに気付いたよ」 |
| ○ 音楽で自分を表現できる子供
「ぼくは、重い感じをだしたいから、音色をコントラバスにして演奏してみよう。」 | ○ 音楽経験を生かす子供
「前に学習した木琴にチャレンジして、もっと上手に演奏できるようにしよう。」 |

研究の成果や課題を生かして、上記のような子供を育てていくためには、次のようなことが必要ではないかと考え仮説とした。

- 音楽の基礎・基本の中でも、特に、音楽と自分のつながりを意識する出発点でもある「きく」ことを大切に授業を行う必要があるのではないか。
- 教材の開発やドレみりよくカードの活用、達成感のある活動の設定などを通して、多様な音楽の魅力に気付いたり、より深く音楽の魅力を感じたりできるようにする必要があるのではないか。
- 音楽を通して人との交流をしたり、学習した音楽を自分の生活に生かしたりするような場の設定を通して、音楽活動をする意味や目的について考え、音楽と自分のつながりを強く意識する必要があるのではないか。

そこで、仮説を検証していくために本年度、研究副主題を「音楽の魅力を感じて、音楽と自分のつながりを意識する授業の追究」とし次の(1)から(3)のような研究内容を設定し実践することにした。

- | |
|--|
| (1) 音楽の基礎・基本を身に付けることができる活動の工夫
(2) 音楽の魅力にかかわる教材の開発やより深く感じるための活動の工夫
(3) 人とかかわりや授業と生活をつなぐ題材や活動の設定 |
|--|

3 研究の内容について

(1) 音楽の基礎・基本を身に付けることができる活動の工夫

音楽部では研究初年度より音楽の基礎・基本を「かんじる・かなでる・きく」の3つに分類してきた。本年度は、音楽活動全般にかかわるものであるとともに、音楽と自分のつながりを意識する出発点でもある「きく」ことを大切にしていこうと考えた。「かんじる・かなでる」についても、活動に応じて必要となる時に、特に重点的に定着を図ろうと考えた。

ア 「きく」ことを大切にする活動の工夫

初めに、「きく」ことを通して身に付けて欲しい聴き方や聴いて欲しい内容を低・中・高学年ごとに整理をした。3つの鑑賞の能力に加えて、「身の回りの音への関心」「音の聴き合い」という項目も加えて考えた。ここから、1つの題材の中で特に身に付けて欲しい聴き方や聴いて欲しい内容をテーマとして設定し、授業の中に少しずつ、連続して設定していくことにした。

【「きく」活動を通して身に付けたいこと①曲想 ②要素・構成 ③表現媒体 ④身の回りの音への関心 ⑤音の聴き合い】

	聴き方	聴く内容	主な活動例	曲目
低学年 楽しんで聴く	① 曲想を楽しんで感じ取る ② リズム、旋律及び速さに気を付ける。 ③ 楽器の音色に気を付けて聴く。 ④ 身の回りにある音に関心を持って聴く。 ⑤ 友達の音を気を付けて聴く。	A 日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい曲 B 行進曲、踊りの音楽、身体反応の快さを感じ取りやすい音楽などいろいろな種類の楽曲 C 児童によって親しみやすい、いろいろな演奏形態による楽曲	○ 音楽に合わせて主な旋律を口ずさんだり、身体表現をしたり、対照的な楽曲や演奏を聴き比べたりする。 ○ 楽器で「いい音見つけ」の活動をしたり、「この音何の音」の活動を通して楽器の音色への関心を高める。 ○ 「みみすま」になって身の回りの音探検をする。	A 「そりすべり」「水族館」 B 「踊るこねこ」「子犬のワルツ」「くまばちの飛行」「動物の謝肉祭より」「かめ」「ぞう」「カンガルー」「タイプライター」など

「きく」活動のテーマ例 「想像しながらきこう」1年

この題材では①の「曲想を楽しんで感じ取れる」という聴き方を身に付けて欲しいと考えテーマを設定した。子供たちが情景や様子を想像しやすい曲を選曲して、主な旋律を口ずさんだり、身体表現をしたりしながら聴くことを通して、楽しく曲を聴いて情景や様子を想像して欲しいと考えた。

イ 意欲的に「きく」ことができる教材提示の工夫

自分とは全く関係のない音を聴くという行為は、記号や信号として聞き流しているのと同様に無関心なままで終わることもある。そこで今まで以上に、聴いた後で自分なりの思いが持てたり、感じ方が変わったりすることができるように、映像と音の組み合わせ方を工夫したり、

鑑賞する曲の背景やエピソードなどの伝え方を工夫したりした。

(2) 音楽の魅力にかかわる教材の開発やより深く感じるための活動の工夫

昨年度までの研究で、音楽の魅力を感じることが子供の活動の原動力になってくることが分かってきた。本年度は、より多様な音楽の魅力を感じるための教材の開発や、より深く音楽の魅力を感じたりすることができるような活動の工夫をすることで、音楽と自分のつながりを意識すること、つまり学びに目覚める子供につながっていくのではないかと考え、研究を進めた。

研究を進めていくにあたっては、子供一人一人がどのように音楽の魅力を感じたのか、それが題材を通してどのように深まっていったのか、それをどのように見取り子供の支援に生かしていったのかということについても考えてきた。

ア 多様な音楽の魅力を感じるための教材の開発

昨年度より、音楽の魅力を「活動の魅力」と「要素の魅力」に分けて考えてきた。本年度も、子供がより意欲的に活動に取り組む場面の中に含まれている音楽の魅力を分析し「活動の魅力」と「要素の魅力」のバランスに気を付けて、固定観念にとらわれず新しい視点で教材の開発を行ってきた。特に活動の魅力については、「見つける」「音楽にのる」「音楽が身近なる」といった視点で考えてきた。

【音楽の魅力（活動の魅力）に迫る活動例】

できる	合わせる	遊ぶ	イメージする	つくる	伝わる
・楽器や歌唱の技能向上を実感できる活動 ・レベルの高い活動に粘り強く取り組み達成する活動	・アンサンブルを通して、リズムが合ったり、音の重なりを感じたりする活動	・自由度が高く、音をつかった様々な遊びを考え、広がっていく活動	・鑑賞を通してイメージを広げたり、曲想と音楽の諸要素を結び付けて考えていく活動 ・イメージを広げて表現を工夫する活動	・即興的に音を選んで表現し楽しむ活動 ・音楽を特徴付けている諸要素を生かしてつくり表現する活動	・目的や相手意識を明確にししながら表現する活動

多様な音楽の魅力を感じるための教材の開発例 「ダンス・ダンス・ダンス」5年

本題材では、タップを教材にして、「音楽にのる」という活動の魅力と「リズム」「音色」という要素の魅力を感じて欲しいと考えた。タップは、足を使って発音するが、そのためには、体全体でリズムを感じて、バランスをとらなくてはならないダンスであり、子供が体全体を動かしながら「音楽にのる」ためには適した教材であると考えた。鑑賞の活動や、ボランティアティーチャーを取り入れるとともに、一人一人が装着できるタップシューズをつくり、体験できるようにした。こうした活動の工夫を通して、音楽の魅力を感じることができるようにした。

多様な音楽の魅力を感じるための教材の開発例 「大作曲家と友達になろう」6年

本題材においては、モーツァルトを教材にして、「音楽が身近になる」という活動の魅力を感じて欲しいと考えた。モーツァルトの曲をただ鑑賞するだけでなく、モーツァルトの「キラキラ星」の変奏に自分たちも挑戦するという表現活動を取り入れることで、より深く音楽の魅力を感じることができるようにした。

イ より深く音楽の魅力を感じるための活動の工夫

○ 達成感を生み出すハードルの設定

ある音楽と出会うことで感じた音楽の魅力を原動力に活動していく時に、自分でできた、自分で考えた、自分で表現したなどの何かを乗り越えた、何かを達成したという音楽経験は強く意識に残り、より深く音楽の魅力を感じることになるのではないかと考えた。このような多少の困難さを伴った活動をハードルと呼び授業の中に位置付けていくことにした。

達成感を生み出すハードルの例 「ぼくも私も作曲家」6年

本題材においては、曲づくりのルールをよく理解した上で、全員が4分の4拍子の2フレーズ分のふしをつくり、(4フレーズでも可)丁寧にプリントに記譜をして、世界でたった1つの自分の曲として完成させることをハードルとする。特に、記譜については、多少の困難もあるが、友達のアドバイスや教師の支援を生かして達成することができるようにした。

○ 「きくこと」を軸とした題材展開の工夫

従来のように題材の初めだけでなく、題材の途中や終末にも鑑賞の活動を取り入れ表現と鑑賞の活動が密接にかかわるようにすることで、どんどん新しい音楽の魅力を感知、それが表現

の原動力になったり、自分の表現と比較しながら鑑賞をすることで、今まで気付かなかったことに気づきそれがより深く音楽の魅力を感じることにつながったりするのではないかと考えた。

○ ドレみりよくカードの活用の工夫

昨年度より「ドレみりよくカード」を活用することで、①自分の学びを整理する。②コメントに対するメッセージを書いたり、次の授業で紹介したりして教師の支援に生かす。③友達を感じ方、考え方に気付くという3つの役割を持つことができるようにしてきた。

本年度はさらに、子供たちのドレみりよくカードの記述を分析し、類型化することで、より深く音楽の魅力を感じていると考えられる4つのタイプを明らかにし、教師の支援に生かすことができるようにしてきた。

より深く音楽の魅力を感じていると考えられる記述をしている子供のタイプ

タイプ1 毎時間違う気づきをして、気づきの累積が見られる子供

タイプ2 感じ方や考え方に変容が見られる子供

タイプ3 記述の内容が具体的にってきている子供

タイプ4 友達の表現を見て、自分の表現に生かそうとしている子供

(3) 人とのかかわりや授業と生活をつなぐ題材や活動の設定

ア 音楽を通して人とかかわる題材や活動の設定

誰かのために、思いを込めて表現をするといった相手意識を強く持ちながら活動する題材を設定したり、教師やゲストティーチャーとのかかわり方を、今までのように、演奏をしていただく、演奏の仕方を教えていただくといったことに加えて、その人に音楽の魅力や音楽への情熱を語っていただくような活動を設定したりすることで、人を通して音楽の魅力を感じて、音楽と自分のつながりについて考える機会になるのではないかと考えた。

相手意識を強く持ちながら活動する題材の設定「音楽で伝えよう～お世話になったあの方へ」6年

卒業を迎える6年生が、お世話になった先生方に音楽で感謝の気持ちを伝えるという活動を行った。相手意識や音楽をする目的がはっきりしているのも、意欲的に取り組み、演奏後、先生から感謝の言葉をいただくことで、音楽をする楽しさを感じることができた。

音楽の魅力や情熱を語っていただく活動の設定「私と日本・世界の音楽」6年

ボランティアとしてかかわっていただいた箏教室の先生に、自分の音楽とのかかわりや、箏の素晴らしさなどを語っていただいた後で、演奏のための学習に入った。

イ 授業と生活をつなぐ活動の設定

この場合の生活とは、授業以外の休み時間なども含めて考えた。授業でやったことが生活の中に生かされたり、自分の身の回りにある音楽が授業で生かされたりするような活動を設定し、今まで以上に音楽を身近に感じたり、音楽をすることの意味や目的について考えたりすることが、自分と音楽とのつながりを意識することになるのではないかと考えた。

そこで、音楽が身の回りの生活の中で、どのように生かされているのか気付くような活動や授業で学習したことが何かの役に立つような活動を設定した。

授業と生活をつなぐ活動の設定例「生活の中の音楽探検」4年

本題材では始めに、お店の中で流れている音楽やCMソングなど、自分の身の回りにある音楽の中には、その音楽の曲想を生かしたものがあつることにつつき、どのように曲想を生かしているのかを見つけるような活動を設定した。次に、その活動を生かして、みんなが楽しい気持ちで1日のスタートを切れるように、登校の音楽を見付けるという活動を設定することで、自分と音楽のつながりをより強く感じることができるようにした。

4 研究の成果と課題

成果として、授業の中に「きく」という活動をより多く取り入れたり、表現と鑑賞が密接にかかわり合った題材を設定したりした結果、子供がより深く音楽の魅力を感じる姿が見られるようになってきた。また、人とのかかわりや授業と生活をつなぐ活動を工夫した結果、より音楽と自分とのつながりを意識することができ、意欲的に活動する姿が見られるようになってきた。課題としては、音楽の授業の中での学び合いの質的な向上を図っていくことが挙げられ、研究を進めていきたい。